

未来を切り拓く資質・能力を育成する国語科教育の創造 —調査問題等を効果的に活用した授業改善を通して—

薩摩川内市立里中学校 教諭 池田 貴裕

目 次

1	はじめに	2
2	研究の構想	3
	(1) 研究主題・副題についての基本的な考え方	
	(2) 調査問題と解説資料の特徴	
	(3) 生徒の実態	
	(4) 自身の課題	
	(5) 研究の方向性	
3	研究の実際	5
	(1) 調査問題を活用した言語活動設定の工夫【視点Ⅰ】	
	(2) 解説資料を活用した学習評価の工夫【視点Ⅱ】	
4	検証授業の実際	7
	(1) 第2学年における検証授業の概要（5月中旬）	
	(2) 第3学年における検証授業の概要（6月上旬）	
5	成果と今後の方向性（○：成果，●：今後の方向性）	11

【引用文献】

全国的な学力調査に関する専門会議	『全国的な学力調査の今後の改善方策について（まとめ）』	2017年
文部科学省	『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』	2018年
文部科学省・国立教育政策研究所	『OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）のポイント』	2019年
国立教育政策研究所 教育課程研究センター	『平成31年度全国学力・学習状況調査 解説資料』	2019年
国立教育政策研究所 教育課程研究センター	『平成31年度全国学力・学習状況調査 調査問題』	2019年

【参考文献】

教育課程研究会 編著	『「アクティブ・ラーニング」を考える』	2016年	東洋館出版社
奈須正裕 著	『「資質・能力」と学びのメカニズム』	2017年	東洋館出版社
文部科学省	『平成30年度全国学力・学習状況調査活用事例集』	2018年	
高木展郎	『評価が変わる、授業を変える』	2019年	三省堂

1 はじめに

2019年、平成の時代が終わり令和の時代が始まった。新たな時代が幕を開けた今日、我が国や世界を取り巻く環境は大きな転換点を迎えている。生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新、Society 5.0の時代の到来など、社会構造や労働環境は一層変化が激しく、予測困難なものになってきている。この変化の激しい現代社会において、未知の状況においても柔軟に対応するとともに、よりよい解を見いだして自らの未来を力強く切り拓いていくための資質・能力の育成が求められている。

このような社会的状況の変化を踏まえ、学校内にとどまった学力ではなく、社会生活においても生かすことのできる学力の育成を目指し、平成29年に新たな学習指導要領が告示され、これからの時代に求められる資質・能力が三つの柱で整理された。そして、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善を図り、授業を通して、これらの資質・能力を確実に育成することを目指している。

さて、この新学習指導要領において育成を目指す資質・能力の定着の程度を把握する機会の一つに、全国学力・学習状況調査があり、調査問題作成の基本理念^{*1)}について次のように示している。

全国学力・学習状況調査の調査問題については、新しい学習指導要領が求める育成を目指す資質・能力を踏まえ、それを教育委員会や学校に対して、具体的なメッセージとして示すものとなるよう検討を進める。
(一部抜き出し)

また、全国学力・学習状況調査を実施する目的^{*2)}の一つを次のように示し、授業改善の視点も掲げている。

学校における個々の児童生徒への教育指導や学習状況の改善・充実等に役立てる。
(一部抜き出し)

つまり、全国学力・学習状況調査を効果的に活用することで、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善を図り、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力を育むことができるということである。そのため、これまでも全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、国や都道府県、市町村等を単位とした数多くの施策や取組がなされてきた。『平成30年度全国学力・学習状況調査活用事例集』や本県の施策等を基に、その一部を整理すると図1のようになる。





<h3>「授業アイデア例」の活用</h3> <p>「授業アイデア例」は、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、課題が見られた設問に関して、国立教育政策研究所が課題を踏まえた具体的な取組の参考となる授業展開例を示したものである。同資料には、特に留意すべき指導上のポイントや他学年での指導に生かす際の参考となる情報等についても記述されており、生徒の実態を踏まえながら工夫して取り入れることで、授業の一層の改善・充実を図るなどの効果が期待される。</p> 	<h3>「独自の集計・分析システム」の活用</h3> <p>「独自の集計・分析システム」とは、調査問題実施後、各学校が任意で自校採点を行い、その結果をインターネット上で配信する独自のシステムに入力して、分析を行うことである。</p> <p>「独自の集計・分析システム」を活用することにより、学校や生徒一人一人の課題を国の調査結果を待たずして把握することができるので、生徒一人一人のつまずきに応じた個別指導の充実を図る効果が期待される。</p> 
<h3>「S-P表」の分析</h3> <p>「S-P表」とは、全国学力・学習状況調査の結果を学校や学級を単位とし、正答数の多い順に並べ替えた表の中にS曲線とP曲線を書き入れたものであり、平成30年度から配布されている。</p> <p>「S-P表」を活用することにより、生徒が理解していない可能性が高い設問を見つけ出すとともに、焦点を絞った的確な学習指導を行うなどの効果が期待される。</p> 	<h3>「独自問題」の作成</h3> <p>「独自問題」とは、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、明らかになった課題を中心に、その克服を目指して作成された独自の評価問題のことである。</p> <p>「独自問題」を作成・活用することにより、新学習指導要領を踏まえた思考・表現を伴う問題に生徒が触れる機会を増やし、学力向上や指導法の改善を図るなどの効果が期待される。</p> 

図1 全国学力・学習状況調査を活用した授業改善等の取組（一例）

*1) 『全国的な学力調査の今後の改善方策について(まとめ)』 平成29年 全国的な学力調査に関する専門会議 P.7

*2) 同上 P.1

一方で、調査問題そのものを効果的に活用した取組事例を見付けることはできなかった。インターネット等を用いて収集した情報を基にすると、調査問題を活用した取組のほとんどが「過去問題」として問題演習に取り組む内容であった。

調査問題を活用して、繰り返し問題演習を行うことにはもちろん価値がある。なぜなら、生徒が良質の問題に繰り返し触れ、解答し、理解するという活動を繰り返すことを通じて、新学習指導要領が求める資質・能力を確実に身に付けさせることになるはずだからである。また、繰り返し問題演習を行うことは、問題に「慣れ」させることにもつながる。先日発表されたPISA2018の調査結果では、問題形式に慣れていなかったことにより、子供たちが十分な力を発揮することができなかったのではないかという分析結果も出されている*3)。生徒が、自らのもてる力を十二分に発揮できるようにするためにも、調査問題の形式に慣れておくことは、十分に価値があると言える。

しかし、調査問題自体を効果的に活用した取組の在り方を模索することも重要である。なぜなら、調査を実施した後、翌日からすぐに使える資料は調査問題であるからである。先述したように、調査問題には生徒に身に付けさせるべき資質・能力や授業改善の要素が「問い」として織り込まれている。国や都道府県等で行う結果分析や対策を待ちつつも、調査問題を効果的に活用して、少しでも早く授業改善へとつなげる方法を研究する必要があると考えた。

そこで、調査問題等を効果的に活用し、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を行うことを通じて、これからの時代に求められる資質・能力の育成を目指す国語科教育の創造に向けた研究を進めることにした。

2 研究の構想

(1) 研究主題・副題についての基本的な考え方

ア 「未来を切り拓く資質・能力を育成する」とは

「未来を切り拓く資質・能力」とは、これからの時代に求められ、新学習指導要領において育成を目指す三つの資質・能力のことである（図2）。

国語科の学習指導においては、新学習指導要領の指導事項、ひいては指導事項に基づき設定した「単元の目標」がそれに当たる。

したがって、「未来を切り拓く資質・能力を育成する」とは「国語科の学習指導を通して、単元で設定した目標（指導事項）を確実に育成すること」と捉える。

イ 「調査問題等を効果的に活用した授業改善」とは

先述した通り、全国学力・学習状況調査の結果を活用した創意工夫に富む取組は数多く見受けられる。どの取組も目的や具体的方策が明確であり、参考になるものばかりである。その中でも、多様な取組の中の一つとして、調査実施直後に「全国学力・学習状況調査を活用した授

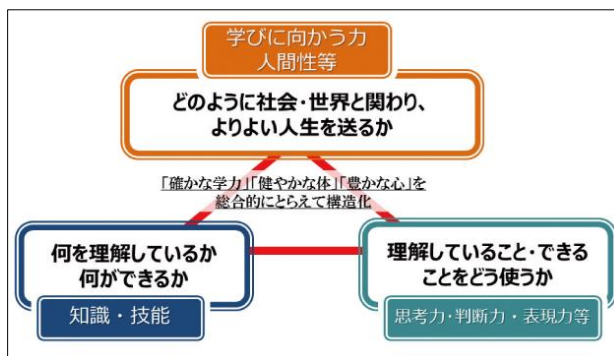


図2 育成を目指す資質・能力の三つの柱
(中教審「28年答申」より)

*3) 『OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)のポイント』(令和元年 文部科学省・国立教育政策研究所)において、「読解力の平均得点の低下に影響を与える要因について分析したところ、…(中略) コンピュータ画面上での長文読解の慣れ等(後略)… 様々な要因が複合的に影響している可能性があると考えられる」と分析されている。 P.4

業改善の在り方」を模索することが、本研究の目指すところである（図3）。

したがって、「調査問題等」とは、全国学力・学習状況調査の「調査問題」と実施後すぐに公表される「解説資料」のことを指す。

そして、これまでに行ってきた実践や、実践を通して明らかになった指導上の課題等を踏まえ、調査問題と解説資料を活用しながら主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を行うことを目的としたい。

そこで、「調査問題等を効果的に活用した授業改善」とは「調査問題と解説資料を活用し、これまでの実践を通して明らかになった指導上の課題等を改善すること」と捉える。

(2) 調査問題と解説資料の特徴

調査問題作成の基本理念については、先述したとおりである。

また、『平成31年度全国学力・学習状況調査解説資料』（P.1）には、『解説資料』そのものの特徴について、次のように記載されている。

- 全ての先生が、学習指導の改善・充実に活用できるものを目指して作成しています。
- 調査実施後、すぐに活用できるように作成しています。

（一部抜き出し）

これらの内容を踏まえると、調査問題と解説資料を効果的に活用することで、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を行うことができる。

(3) 生徒の実態

本校国語科における生徒の実態としては、例えば、平成31年（令和元年）度の標準学力検査（NRT）を分析してみると、全学年で平均偏差値が全国値を上回っていた。

しかし、領域ごとの平均通過率を分析してみると、「読むこと」の領域において、2・3年生ともに全国平均を下回っており、課題があることが明らかになった（図4）。

このことから、本研究では「読むこと」の領域に焦点を当て、研究を行うことにした。

(4) 自身の課題

これまで、主体的・対話的で深い学びの視点に基づき、次頁図5に示すような考え方で授業改善を行ってきた。そして、実践を重ねる中で浮かび上がってきた課題は次の二点である。

一点目は、単元に位置付ける言語活動についてである。「言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する」*4)とされる国語科では、単元等に位置付けた言語活動を通して指導事項を育成することになる。しかし、指導事項や教材に応じて言語活動を設定することにはいつも苦慮している。「活動あって学びなし」と言われること

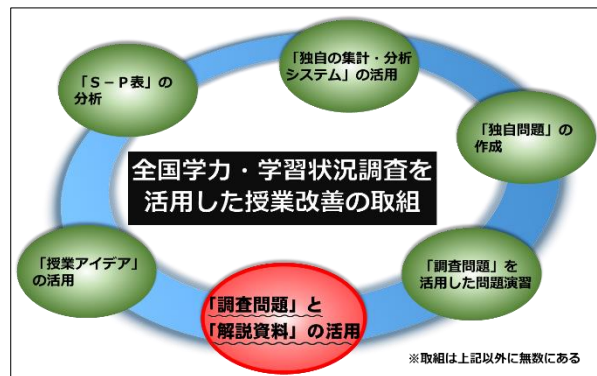


図3 本研究の位置付け

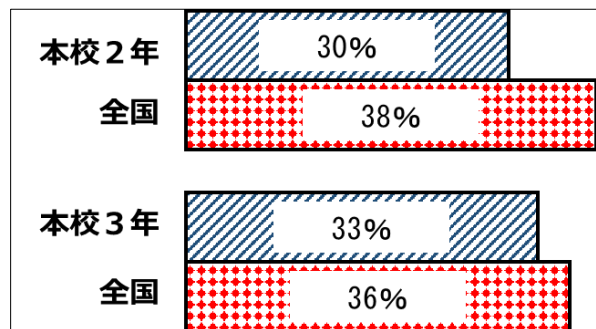


図4 平成31年(令和元年)度NRT「読むこと」の領域における通過率

*4) 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』 P.12

があるように、単元に位置付けた言語活動が指導事項にふさわしく、かつ主体的・対話的で深い学びへと導くものであると言えるのか考えることが多い。

二点目は、学習評価についてである。単元で設定した指導事項に基づき、評価規準を作成して評価していくことになる。その評価規準を基にして、生徒の成果物や学習態度等をどのような観点を用いて評価するかについては、各授業者に委ねられている。具体的な「評価する際の基準」の設定の仕方やその考え方など、これまで行ってきた実践においては、この学習評価の取組が不十分で

あったと感じている。しかし、適切な学習評価を行うことを通して、指導と評価を一体化させた授業改善へとつなげるとともに、学習評価を生徒に返して身に付けた資質・能力を自覚化させて意味付けさせるためにも、学習評価についての理解や実践力を一層深める必要がある。更なる授業改善を図るため、これは本研究において特に明らかにしたい視点である。

(5) 研究の方向性

上記を基にし、調査問題作成の意図や解説資料の役割を踏まえ、次の図6に示す二つの視点について、その在り方を模索することを本研究の方向性とした。

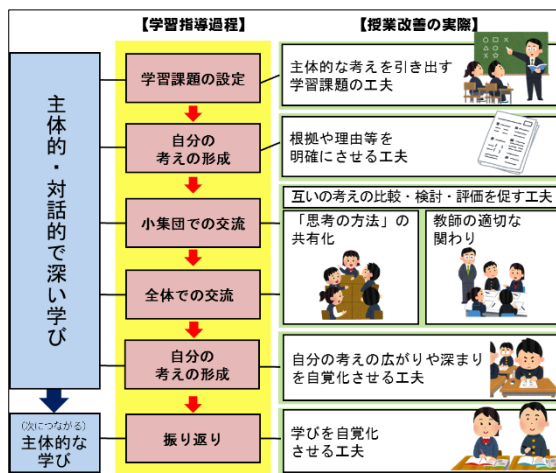


図5 授業改善の考え方 (私案)

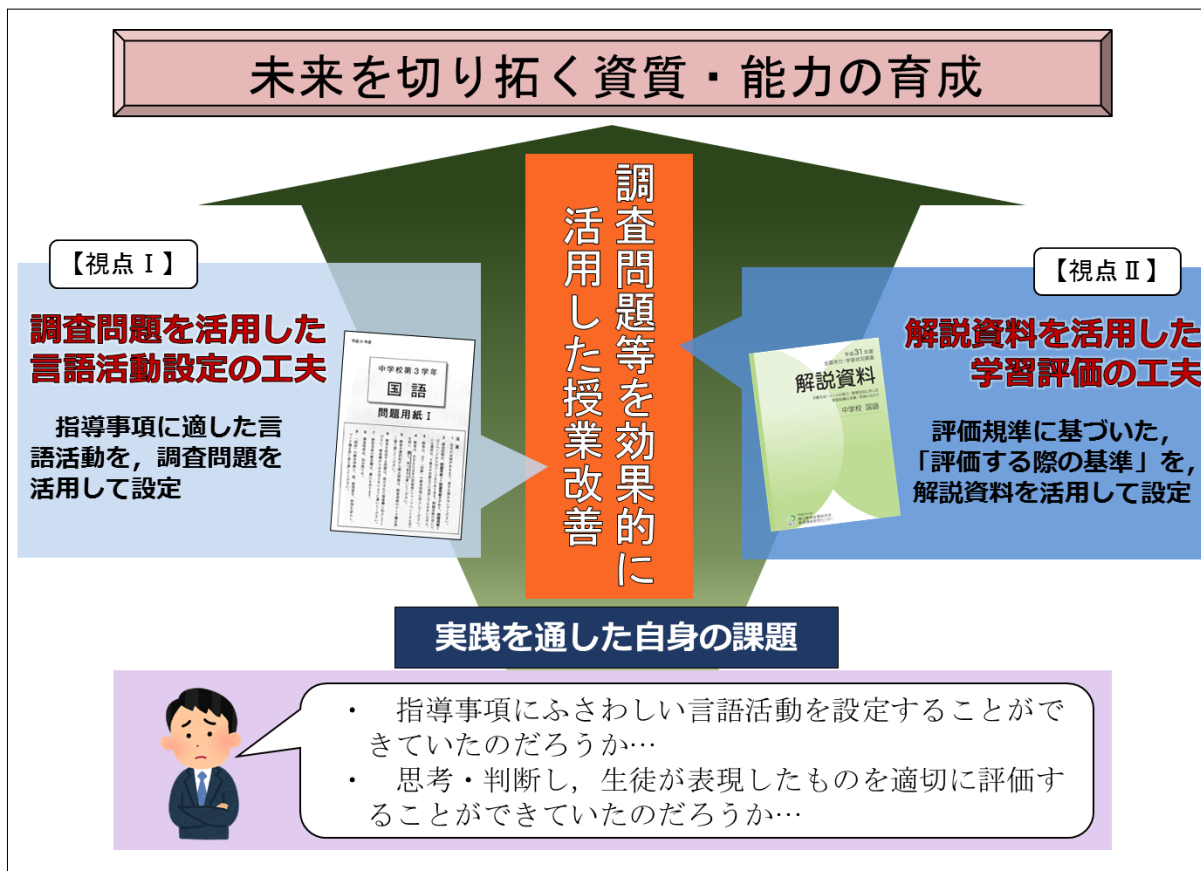


図6 本研究の方向性

3 研究の実際

(1) 調査問題を活用した言語活動設定の工夫【視点Ⅰ】

言語活動を通して指導事項を指導する国語科にとって、生徒に資質・能力を確実に育成するた

めには、指導事項に適した言語活動を設定し、学習活動を展開することが重要である。

ここで改めて調査問題を見てみると、調査問題は設問ごとに関係する指導事項が明確に設定されている。また、調査問題を作成する際の配慮の一つに「(前略)生徒の言語活動を充実すること」という観点を取り上げられている*5)。これらのことから、調査問題における設定場面や学習活動は、設問ごとに設定されている指導事項に適した言語活動例の一つとして捉えることができるのではないかと考えた。

そこで、調査問題における設定場面や学習活動を、授業の中で考えられる学習活動や言語活動として捉え直し、授業の中で再現することにした。具体的には、調査問題と解説資料を用い、表1のように整理・分析し直し、目標や学習の目的に応じて、単元における言語活動として位置付けた。

表1 調査問題と解説資料を用いた整理・分析*6)

問題番号	指導事項	設問中の設定場面や学習活動	授業の中で考えられる学習活動	言語活動	指導上の留意点
1	一 2年 読ウ	リード文がもつ役割や効果について考える。	新聞を読み、リード文の表現の工夫や効果について分析し、根拠を明確にしてまとめる。	表現を工夫して、新聞のリード文を書く。	リード文を書く際の工夫とその目的を明確にさせる。
	一 1年 読イ	見出しに関わる本文の内容を捉える。	新聞を読み、見出しに関わる情報を過不足なく捉え、まとめる。	新聞の内容を的確に捉え、本文にふさわしい見出しを付ける。	見出しを書くに至った理由を明確にさせる。
	三 1年 読オ	短歌を読んで感じたことや考えたことをまとめる。	短歌を読んで感じたことや考えたことをまとめる。	短歌を読み、その魅力を紹介文としてまとめる。	共感したり、疑問をもったりしたことの根拠を明確にさせる。
	四 1年 言ア	封筒に相手の名前と住所を書く。	封筒に相手の名前と住所を書く。	成果物をコンクールに応募するための封筒を書く。	手紙の形式に込められた相手への敬意について考えさせる。

なお、整理・分析する際は、解答類型に記載されている言葉を基に、「指導上の留意点」として併記することで、言語活動を行わせる上で留意すべき視点を教師が明確にもつことができるようにした。これらのことにより、指導事項に適した言語活動を設定することができる。

(2) 解説資料を活用した学習評価の工夫【視点Ⅱ】

生徒がどのような資質・能力を身に付けたか把握するためには、生徒が思考・判断したことを通して、何らかの形で表出した表現物等を的確に評価する必要がある。また、その評価を基に、適切な指示・助言を行うことを通して、資質・能力の確実な育成を図ることが求められる。そのためにも、単元で設定した評価規準に基づき、その達成の度合いを判断する具体的な基準を設定することが重要である。

ここで改めて解説資料を見てみると、指導事項に基づいて作成された設問ごとに、解答類型が設定され、正答の条件が評価の観点として明記されている。この解答類型や正答の条件を、授業における「評価する際の基準」として活用することができるのではないかと考えた。

そこで、設問と同じ指導事項に基づき、類似した学習活動や言語活動を設定した際には、解答類型の正答の条件を「評価する際の基準」として具体的な生徒の姿に置き換え、そのまま用いる

*5) 『平成31年度全国学力・学習状況調査 解説資料』 P.6

*6) 表1に記載されている指導事項は、「現行学習指導要領」によるものである。

ことにした（図7）。

Bと判断する生徒の姿

- ・ 投稿先の名前と住所の正しい内容を楷書で書いている。
- ・ 投稿先の名前に敬称を適切に付けて封筒の中央に書き、住所を封筒の右側に書いている。
- ・ 投稿先の名前を住所より大きく書いている。
- ・ 縦書きで書いている。

解答類型	
問題番号	解 答 類 型
1	四 (正答の条件) 次の条件を満たして解答している。 ① 投稿先の名前と住所の正しい内容を楷書で書いている。 ② 投稿先の名前に敬称を適切に付けて封筒の中央に書き、住所を封筒の右側に書いている。 ③ 投稿先の名前を住所より大きく書いている。 ④ 縦書きで書いている。

※解説資料より一部引用

図7 解答類型を活用した「評価する際の基準」の設定例

また、解答類型の中の「誤答」に関する内容を、Cと判断される生徒の具体的な姿としてそのまま置き換えるとともに、指導助言を通して生徒自身が自らの学習を調整するための具体的な手立てとして活用することにした（図8）。このことにより、予想される生徒のつまづきを具体的なイメージで捉えることができるので、適切な指示・助言につなげられる。

**Cと判断する生徒の姿
→具体的な指示・助言**

- ・ 文字の大きさを考えて書くことに課題
→ 投稿先の名前を住所よりやや大きく書くように指示・助言
- ・ 書くべき位置を考えて書くことに課題
→ 投稿先の名前は封筒の中央に書き、住所は封筒の右側に書くように指示・助言
- ・ 文字の形を整えて書くことに課題
→ 投稿先の名前と住所について正しい内容を楷書で書くように指示・助言

- 【解答類型2】は、文字の大きさを考えて書くことに課題がある。ここでは、投稿先の名前を住所よりやや大きく書く必要がある。
- 【解答類型3】は、紙面全体に対してそれぞれの文字の書くべき位置を考えて調和的に割り当てて書くことに課題がある。ここでは、投稿先の名前は封筒の中央に書き、住所は封筒の右側に書く必要がある。
- 【解答類型4】は、書こうとする文字の字形を整えて書くことなどに課題がある。ここでは、投稿先の名前と住所について正しい内容を楷書で書く必要がある。

※解説資料より一部引用

図8 解答類型を活用した「Cと判断する生徒の姿と指示・助言」の設定例

さらに、設問に設定してある指導事項の該当学年以外で、設問と類似した学習活動や言語活動を実施する際は、系統表を基に他学年の指導事項に置き換えた。そして、指導事項の系統性を踏まえて具体的な「Bと判断する生徒の姿」、「Cと判断する生徒の姿」を適宜付け加えることにした。これらにより、指導と評価の一体化を通じた授業改善を図るとともに、国語科において求められる資質・能力の確実な育成へとつなげることができる。なお、「Aと判断する生徒の姿」についてはあえて具体的な姿を示さずに評価することにした。なぜなら、Aの姿を具体的に示してしまうと、その姿が達成点となってしまいAの具体的な姿が限られてしまうと考えたからである。これは、多様な解や価値観が求められるこれからの時代に必要となる資質・能力の育成にも合致していると考えられる。

4 検証授業の実践

上記研究の視点に基づいて、検証授業を行った。以下では、特に研究の視点に沿った工夫に焦点を当て、取り上げることにはしたい。また、【視点Ⅱ】の中でも、指導事項の系統性を踏まえた「評価する際の基準」の在り方について明らかにするために、調査問題の設問と類似した学習活動や言語活動を、第2学年と第3学年のそれぞれに位置付けて検証授業を行った。なお、現行学習指導要領の指導事項に基づいて設定されていた指導事項については、『中学校学習指導要領比較対応表』を用い、新学習指導要領の指導事項に読み替えて単元の目標に位置付け、授業を行った。

(1) 第2学年における検証授業の概要（5月中旬）

ア 単元名等

単元名	私が紹介する至高の一首 ～知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする～
教材	「短歌の世界」（『中学生の国語二年』三省堂）
対象	薩摩川内市立里中学校第2学年
実施時期	令和元年5月中旬

イ 単元の目標

(ア) 抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、多義的な意味を表す語句などについて理解し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。

[知識及び技能]

(イ) 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

[思考力、判断力、表現力等]

(ウ) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にしていって思いや考えを伝え合おうとする。

[学びに向かう力、人間性等]

ウ 本単元における言語活動

短歌を読み、その魅力を紹介文としてまとめる。

(関連：[思考力、判断力、表現力等] C(2)イ)

エ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、多義的な意味を表す語句などについて理解し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。	理解したことや考えたことを進んで知識や経験と結び付けるとともに、学習の見通しをもって、自分の考えを紹介文としてまとめようとしている。

オ 単元の指導計画

時	学習活動	評価規準及び評価方法等
1	1 学習のねらいや進め方をつかみ、学習の見通しをもつ。	
2 3 4	2 短歌十首の中で、作者が行っている表現上の工夫やなぜその言葉を用いたか等について考えることを通して、短歌を作成する際の工夫について考える。	[知識・技能] 発表・ノート
	3 教科書の短歌十首に描かれている情景や心情を想像するとともに、知識や経験と比較したり関連付けたりしながら	[思考・判断・表現] 観察・ワークシート
	4 解釈することを通して、短歌の味わい方について考える。	
	4 短歌を作成する。	
	5 作成した短歌を互いに読み合い、お気に入りの短歌の魅力を紹介文としてまとめる。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察・ノート
5	6 作成した紹介文を交流し、自分の考えを広げ深める。	[思考・判断・表現]
	7 単元の学習のまとめを行う。	観察・ワークシート

カ 研究の視点に基づく本単元での工夫

(ア) 【視点Ⅰ】について

本単元における言語活動を、「短歌を読み、その魅力を紹介文としてまとめる」として位置付けた。これは、図9のような流れで調査問題を活用し、設定したものである。

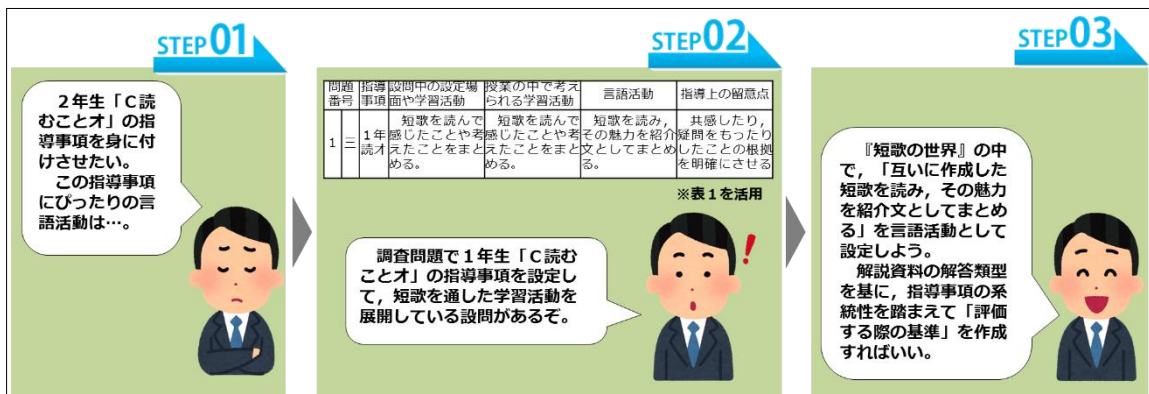


図9 単元の言語活動設定までの教師の思考の流れ

(イ) 【視点Ⅱ】について

本単元では調査問題と類似した学習活動や言語活動を設定したので、解答類型の正答の条件をそのまま用い、「評価する際の基準」として具体的な生徒の姿に置き換えて設定した。また、調査問題で設定してある1年「Cオ」ではなく、2年「Cオ」の指導事項を設定したので、指導事項の系統性を踏まえ、具体的な「Bと判断する生徒の姿」、「Cと判断する生徒の姿」を付け加えて、最終的な「評価する際の基準」を作成した(図10)。

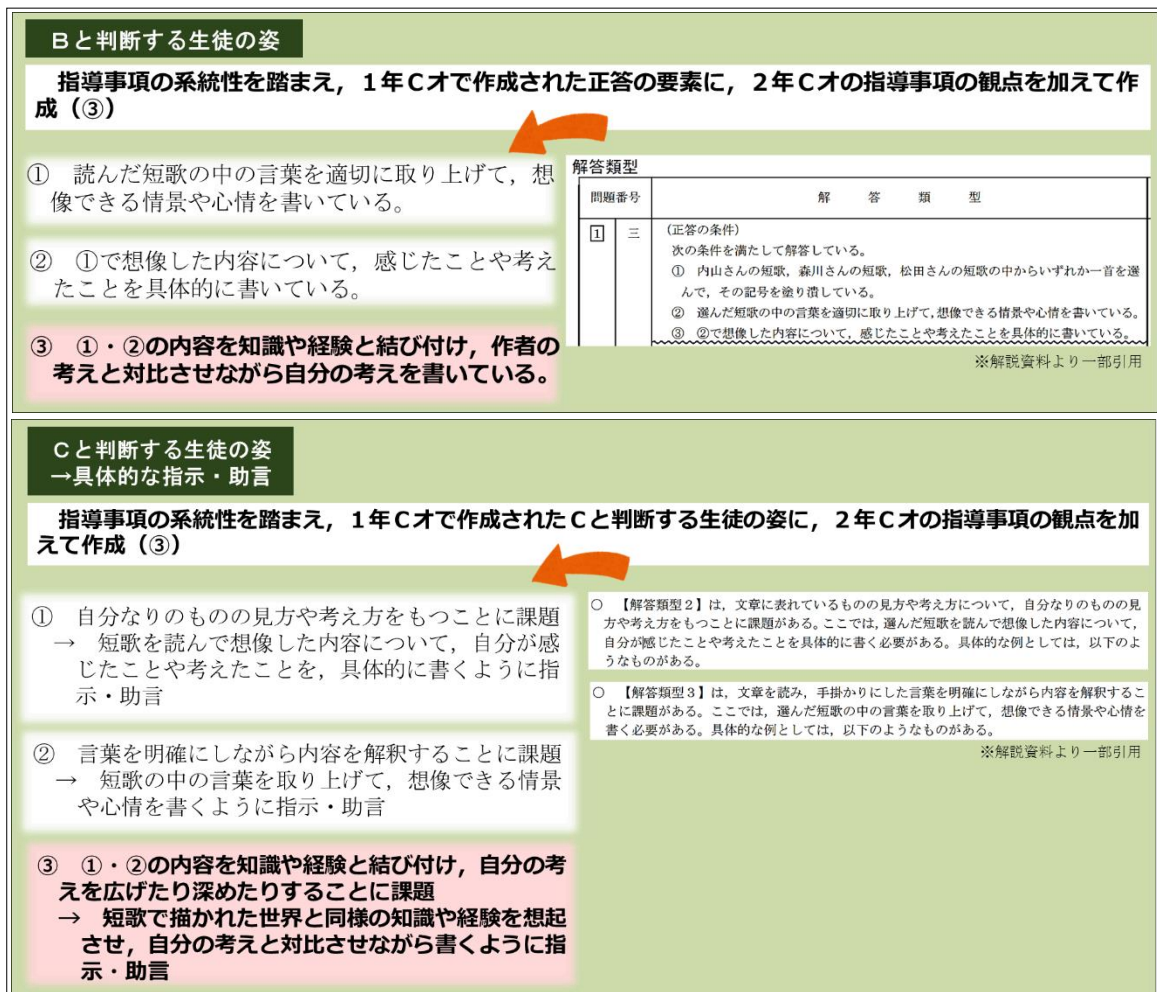


図10 解答類型を基に作成した「評価する際の基準」

キ 【視点Ⅱ】に基づく本単元での評価

本単元では、生徒が思考・判断したことを通して作成した「短歌の紹介文」を基にして評価を行った。図11は、「Cと判断する生徒の姿」を基に、Bを実現するよう具体的な指示・助言を行ったものである。なお、本単元では全生徒がB基準以上を達成した。

BEFORE

「評価する際の基準」に照らすと、
①・②についての記述は見られるが、
③についての記述が見られない…

この短歌を紹介します

選者より
日に焼けた顔をつければ 歌青
「顔をつければ 歌青」と「人魚姫なり」という表現から、夏の暑い日に、顔を海につけ、澄んだ青色にうつりして、顔だけではもたたりなく、ついで泳いでいる様子が想像できます。少しだけ長い長く遊ばすまてしまうような作者の性格が伝わります。この短歌を読むと、海で思いきりはしゃぐたくないます。

教師の関わり

Cと判断する生徒の姿を基に、短歌で描かれた世界と同様の知識や経験を想起させ、自分の考えと対比させながら書くように指示・助言

① 読んだ短歌中の言葉を適切に取り上げて、想像できる情景や心情を書いている。(傍線部)

② ①で想像した内容について、感じたことや考えたことを具体的に書いている。(破線部)

③ ①・②の内容を知識や経験と結び付け、作者の考えと対比させながら自分の考えを書いている。(二重線部)

AFTER

「評価する際の基準」に照らし、①・②・③についての記述が見られるので、B基準と判断

選者より
顔を焼けた顔をつければ 歌青と「人魚姫なり」という表現から、夏の暑い日に顔を海につけて、澄んだ青色にうつりして、顔だけではもたたりなく、ついで泳いでいる様子が想像できます。少しだけ長い長く遊ばすまてしまうような作者の性格が伝わります。私も、夏の海で太陽に照らされた海があまりにもきれいなので、時間を忘れて泳いでいる様子が、あんなにきれいな海は、歌青という言葉にぴったりな海で思いきりはしゃぐたくなりました。

図11 「評価する際の基準」を活用した学習評価と具体的な指示・助言の実践

(2) 第3学年における検証授業の概要（6月上旬）

視点を基に、指導事項の系統性を踏まえた「評価する際の基準」の在り方についての検証を深めるため3年生においても検証授業を行った。ここでは視点に基づいた工夫のみ記載する。

ア 【視点Ⅰ】について

本単元における言語活動を、「俳句を読み、その魅力を紹介文としてまとめる」として位置付けた。これは、図12のような流れで調査問題を活用し、設定したものである。

STEP01

3年生「C読むことⅠ」の指導事項を身に付けさせたい。
この指導事項にぴったりの言語活動は…

STEP02

問題番号	指導事項や学習活動	授業の中で考えられる学習活動	言語活動	指導上の留意点
1	短歌を読んで感じたことや考えたことをまとめる。	短歌を読んで感じたことや考えたことをまとめる。	短歌を読み、その魅力を紹介文としてまとめる。	共感したり、疑問をもったりしたことの根拠を明確にさせる。

※表1を活用

系統表を見ると3年生「C読むことⅠ」の指導事項は、1・2年生では「C読むことⅠ」に該当するのかわ…
調査問題で1年生「C読むことⅠ」の指導事項を設定して、短歌を通じた学習活動を展開している設問があるぞ。

STEP03

短歌と類似した学習活動として、「俳句」を用いることができそうだ。『俳句の世界』の中で、「互いに作成した俳句を読み、その魅力を紹介文としてまとめる」を言語活動として設定しよう。
解説資料の解答類型を基に、指導事項の系統性を踏まえて「評価する際の基準」を作成すればいい。

図12 単元の学習活動設定までの教師の思考の流れ

イ 【視点Ⅱ】に基づく本単元での評価

本単元では、生徒が思考・判断したことを通して作成した「俳句の紹介文」を基にして評価を行った。図13は、調査問題で設定してある解答類型の正答の条件を基に、3年「Cエ」の指導事項を、系統性を踏まえて具体的な生徒の姿に置き換え、「評価する際の基準」を作成して指示・助言を行ったものである。なお、本単元では全生徒がB基準以上を達成した。

BEFORE		AFTER
「評価する際の基準」に照らすと、 ①・②についての記述は見られるが、 ③・④についての記述が見られない…	教師の関わり Cと判断する生徒の姿を基に、俳句で描かれた世界と同様の知識や経験とを対比して自分の考えを明確にし、人間、社会、自然などに考えたことを書くように指示・助言	「評価する際の基準」に照らし、①・②・③・④についての記述が見られるので、B基準と判断
<div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px;"> <p style="text-align: right;">選者より</p> <p style="font-size: 2em; font-weight: bold;">春雷や。パンのにおいと母の声</p> <p>「パンのにおいと母の声」という言葉から、朝食のパンのにおいから、春雷の響きを感じ、また、春雷と母の声の結びつきから、雷のような強い口調で作者が叱られていることが想像できます。この俳句からは母親の優しさを感じます。春雷という言葉を用いるながらも、子供のために早起して、朝食を作ってくれる母親の存在を、作者もありがたいと思っ</p> <p>ていないでしょうか。だからこそ、パンのにおいと、またたかさを感</p> <p>じている言葉の中にも、母の優しさを感じています。どの家庭でも、母</p> <p>親は優しく強い存在であるのだと思います。のだと感じました。</p> <p style="text-align: right;">(選者)</p> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center; gap: 10px;"> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; width: 100%;"> <p>① 読んだ俳句の中の言葉を適切に取り上げて、想像できる情景や心情を書いている。(傍線部)</p> </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; width: 100%;"> <p>② ①で想像した内容について、感じたことや考えたことを具体的に書いている。(破線部)</p> </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; width: 100%;"> <p>③ ①・②の内容を知識や経験と結び付け、作者の考えと対比させながら書いている。(二重線部)</p> </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; width: 100%;"> <p>④ ①・②・③の内容を基に、人間、社会、自然などについて思いを巡らせながら考えを書いている。(波線部)</p> </div> </div>	<div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px;"> <p>「パンのにおいと母の声」という言葉から、朝食のパンのにおいと、起きなせとい</p> <p>と母親が言っている情景が浮かびます。また、「春雷」と母の声の結びつきから、</p> <p>雷のような強い口調で作者が叱られていることが想像できます。この俳句から</p> <p>は母親の優しさを感じます。春雷という言葉を用いるながらも、子供ののために早</p> <p>起きて、朝食を作ってくれる母親の存在を、作者もありがたいと思っ</p> <p>ていないでしょうか。だからこそ、パンのにおいと、またたかさを感</p> <p>じている言葉の中にも、母の優しさを感じています。どの家庭でも、母</p> <p>親は優しく強い存在であるのだと思います。のだと感じました。</p> <p style="text-align: right;">(選者)</p> </div>

図13 「評価する際の基準」を活用した学習評価と具体的な指示・助言の実際

5 成果と今後の方向性 (○：成果，●：今後の方向性)

- 生徒が国語科の指導事項に沿って主体的に思考・判断・表現する姿が見られたことから、指導事項にふさわしい言語活動を位置付ける際に調査問題を活用することは、未来を切り拓く資質・能力を育成するために有効であった。
- 指導事項に基づく的確な評価や指示・助言を行うことができたことから、学習評価を行う際に解説資料を活用することは、適切な学習評価を行うために有効であった。また、解説資料を用いて評価を行うことは、教師の多忙化が叫ばれる中で、効果的・効率的な学習評価の在り方につながる可能性がある。
- 調査問題と類似した学習活動や言語活動を設定し、指導事項の系統性を踏まえた「評価する際の基準」の在り方について検証を深めたことにより、これまで以上に指導事項の系統性を意識した学習指導が行えるようになった。教科内で「評価する際の基準」を共有することを通して、学校全体で発達段階を踏まえた資質・能力の育成を図ることにつながる。
- 新しい時代に求められる資質・能力の更なる育成に努めるために、過去に遡って調査問題を活用したり、他の領域等で実践を積み重ねたりしながら継続して研究を推進したい。
- 指導と評価の更なる一体化を目指すためにカリキュラム・マネジメントを進め、本研究の成果を土台に、学校・学年・教科のグランドデザインとの関連を深めていきたい。